

# 周辺からの記憶 16

～2014 年度：岩手～

村本邦子（立命館大学）

2017 年度、7 年目のプロジェクトがスタートした。今年も夏休みを利用して、「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2017」の前乗りでフィールドワーク。今回は、中村正さんのアレンジで、人と動物をテーマに福島を回った。

8 月 29 日郡山駅前でレンタカーを借り、双葉郡川内村高田島地区の「感がえる知ろう館」を訪ね、西巻裕さんの話を聞いた。福島第一原発 30 キロ圏の境界に接した地区だ。その後、フラガールのいわきスパリゾートを見学し、いわき湯本温泉古滝屋に宿泊。部屋には 300 年を越えるという宿の歴史をまとめた冊子が置いてあって、現社長が震災の危機を「歴史があるから乗り越えることができた」と実感したことから冊子を作成したことが書かれており、興味深かった。

30 日は、富岡町の松村直登さんを訪ねた。12 キロ圏内で、この 4 月 1 日に避難指示が解除されたところだが、無人地帯となったその町に住み続けた人だ。その後、南相馬の復興ツアーに参加、ボランティアガイドの長谷川義信さんに 3 時間ほどかけて南相馬を案内してもらった。31 日は浪江町の豊田動物病院を訪れ、豊田先生と赤間さんの話を聞いた。ここも「帰還困難区域」を除き、4 月 1 日に避難指示が解除されたばかりだ。

詳細はまた後を書くことになるが、原発に近く避難指示区域となっていたところに住み続けたり、活動が続けたりしてきた人たちの尽きることのない話を聞きながら、自分の価値観に添って自分の人生の決断を行い、生きている人は魅力的だと思った。

20 キロ圏内でも、田んぼには青々と稲が育っていた。食べられないので、家畜の餌になるそうだ。こんなに美しい土地を汚し、生態系を崩してきた人間の欲望と愚かさを悔やむばかりだ。



2014年10月30日(木)

## 支援員の仕事

### 大船渡の仮設住宅支援員のこと

宮古でのプロジェクトに入る前、一足先に岩手に入った。2年目のプロジェクトを実施した大船渡を訪ね、その時、お世話になった大船渡市仮設住宅支援事業コールセンター・マネージャーXさんに話を伺った。

大船渡市は、仮設住宅の支援を大阪に本社のある人材派遣会社に委託した。被災者を雇用して、37か所の仮設に100名の支援員を配置し、支援を展開してきた。支援員は71名。皆、素人同然で、2011年8月31日に集まって、9月1日にスタートするという、場当たりの、何もわからない中でのスタートだったという。

プロジェクトを実施した時も、支援員の方々は大変そうだったが、みなさん精一杯やっておられ、その後どうされているのか、ずっと気になっていた。



どこにもないシステムだった。大船渡市が最初で、半年後ぐらいに大槌でも同様のものが立ち上がった。人材派遣会社は人事や労務管理のノウハウはあっても、支援事業のノウハウはないので、時間をかけ、いろんな形で他所と連携しながらやってきた。当初は、仮設の集会所に常駐していた。最初から受け入れられたわけではなく、軋轢もあった。それでも、3年半かけてコミュニケーションをとるうちに、「支援員さんがいる方が安心」と言ってもらえるようになった。

現在は、月曜から金曜の8時半から夕方5時半まで常駐して、何かあった場合に対応する。他の自治体は巡回で訪問しているが、完全常駐でやっているのは強みだと思う。例えばイベントがあるとすれば、事務局に連絡をもらおうと下の方に落とし込んで、イベント開催側がそこに行けば鍵も開いているし、準備も万端整っている。常駐のないところでは、約束した日時に行ったら、鍵も開いていないし、人もいないということもある。システムティックにやれる。毎日集会所に行けば支援員がいるから話ができるということで、やはり最終的にはコミュニケーションだ。

困りごと相談、自治会の手伝い、市と連携したイベントの手伝いや広報、各仮設で新聞も作ってきた。大船渡市全体でも「はまらい新聞」というのを作っている。「はまらい」というのは、「寄っておいで」という意味。困り事相談の統計も取ってきたが、時間経過とともに相談内容は変わってきた。一般的には、「仮設に入れて良かった良かった」となるが、少し時間が経過すると、鍵の回りが良くない、建付が気になるなど家のハード面に関する相談が多くなった。2年目、3年目に入ると、隣の物音がうるさい、犬の鳴き声が気になるなどプライバシーに関わること、あとはアル中とうつ病等が増えた。家族からの相談もあれば、本人からの相談もある。一人暮らしの男性が、アルコールの影響もあって持病が悪くなり、不安で救急車を呼ぶとか、高齢者の徘徊もある。すごく多いわけではないが、長期にわたる問題だと思う。具体的な問題については我々が解決

するものではないので、適切な機関や市の方に連絡する。

イベントで出てこられる人はいいが、出てこない人もある。安否確認のために日々声かけをしているが、訪問拒否とまではいかないものの、「大丈夫だから来なくていい」と言われる方もいらっしゃる。そういう場合は、時々、手紙を入れる。そういった方々も毎日の買い物には出るので、集会所から気をつけて見ていて、一日中姿が見えず、翌日も見えないとなったら、市役所に報告して鍵を借り、一緒に開けるようなこともある。市町村によっては孤独死が発生しているが、幸い今のところそれはない。

## これからの課題

今後、公営住宅が立ち上がり、高台移転が進むが、方向性が決まらない人たちもいる。大船渡では、もともと 1,800 世帯が仮設住宅だったが、現在は 1,500 世帯を切っている。この秋から来年にかけてそういう移動が顕著になってくるだろう。ある仮設では、もともと 90 あったところが今は 70、1 年後には 10 になると予想されている。そうなってくると、残っているのは一人暮らしのおばあさんなどで、取り残され感や不安も出てくるだろう。そこが学校のグラウンドだと、移動してくださいとなる。ここの仮設は 300 で一番大きく、最後まで残ると予想されているので、引っ越してくることになるかもしれないが、いくら引っ越し費用を出すと言われても、なかなか大変だろう。お別れして出て行った人たちが、一軒家の立派な家が建って皆に羨ましがられるけれど、朝、息子たち家族を送り出すと昼から夕方まで山の中でひとりテレビとにらめっこ、仮設の集会所で皆と話していた方が楽しかったという人も中にはいらっしゃる。支援員も契約なので、更新更新で次の 3 月まで。後は市の判断。神戸の大震災の時も、仮設がゼロになって、全部公営住宅になってから孤独死が増えたと聞く。それを踏まえて、同じ思いはさせないという形で大船渡市は考えていかないといけないと思う。

被災者が支援員をしている。支援員も 3、4 割はまだ仮設住まい。X さんもまだ仮設

に住んでいて、身近な人を亡くしていた。当時、会社が津波に流されたわけではないが、解雇という形になり、支援員の募集が大々的であったので応募した。「仮設住宅の支援員って何だろう」と思いつつ、仮設でのお手伝いと言われ、「自分も被災したが、被災した人同士わかり合えるかもしれない、何かお手伝いできるかな」と思った。同じように考えて応募した人も結構いるのではないかなと思う。もしかすると、それがマイナスに働いた方もあるかもしれない。余りにも近くて。被災のことは四六時中頭の中にある。それが一日何回か、絶対離れることはないだろうし、皆、それで生きていると思う。それでも、支援員の多くが仕事を続けており、やりがいを感じていると思う。1 年以上経ってからだったかもしれないが、会社が臨床心理士の先生と契約して、毎月、傾聴研修や交代で支援員のカウンセリングをお願いするようになった。

## 外部からの支援について

外部の人が来てくれて、おばちゃんたちもお茶のみとかに来て、最初の頃は気が紛れるというのはあった。ある程度継続して来て頂けるのはありがたかった。何をするかということよりも、継続して来るということが。例えば一人で歌を歌いに来てくれる方にしても、5 回目、6 回目となると、何ていうか、お互いこの場所にはこの人がいてというのをわかりあっているの、全然他人みたいでなく、垣根を越えた話ができるようになる。岩手県立大学の先生や学生さんたちも PC 関係の講習に来てくれている。顕著だったのは、NPO にしろ、各自治体にしろ、個人にしろ、高速道路の料金がゼロだった時があったが、それが打ち切りになって 1 年後ぐらいかな、ある時点を境に、「予算の関係で、申し訳ないですけど、様子を見させていただきます」というのがあった。年度末の予算縮小とか。それは当然、仕方ないことだが。

私たちのプロジェクトが来た 2 年前のことも尋ねてみたが、「立命館大学さんってメジャーで、いろいろサポートして頂いたので、あの時も何の疑問もなく。ただ、あ



そこは立地条件がよくないので、どれぐらい人が行くかなという思いもあって、部下や家族を誘って行ってみた」ということだった。そんなふうに気遣われていたのだということを初めて知った。その後は、プロジェクトに来てくれたご家族のその後の様子を伺い、お土産を言づけた。

マネジメントに長けた人材派遣会社が、仮設住宅の支援員として被災者を雇用し、業務展開するシステムはユニークだと思う。その評価がどんな形でなされているのかわからないが、初期段階からメンタルヘルスに関するノウハウを持つ会社と提携することもできるだろう。「被災のことは四六時中頭の中にあるなかで、皆、生きている」との言葉は胸に突き刺さる。大人も子どもも生傷を抱えながらも、精一杯、生きている。「今、3年半。神戸で仮設が完全になるまで6年だったか、もしかしたら仮設がなくなるまで10年かかるかもしれない」とのこと。どんなに遠くからだとしても関心を寄せ続けたい。



**2014年10月31日(金)**

**ベルガーディア鯨山「風の電話」へ**

遠野の大平さん(前号参照)に勧められ、大槌にある「風の電話」を訪れることにした。亡くなった人に思いを伝えられるということで有名になり、マスコミでも大きく取り上げられていた。「風の電話」は岩手県上閉伊郡大槌町浪板にあるベルガーディア鯨山にある。海岸沿いの45号線はわかりやすいが、大槌の町に入っていくと、あちこちが復興の作業中で道がさっぱりわからない。工事の人たちに尋ねながら何とかたどり着く。



## 誕生パーティー

この日も NHK の撮影が入っていた。「一緒にどうぞ」と招かれ、ティーハウスに入ると、テーブルの上に素敵なティーセットが並べられていて、お皿には花と一緒に焼き芋とチーズケーキが乗っていた。来られていたのは、陸全高田の佐々木一義さんとそのおばさん。今日は、津波の犠牲となった佐々木さんの妻の 61 歳の誕生日で、これからパーティーが始まるころだった。テーブルに、52 歳の誕生日の時の写真を立てる。

一義さんは、妻とのなれそめを語ってくれた。中学の時から同級生で片思い、ラブレターを3回書いたがダメだった。高校を卒業する時、恨みがましい気持ちを持っている自分をやめる決意をして、「これだけ思ってもつながらなかったのだから、縁がなかったのだろう。恨みは捨てて、これからは友達として」と手紙を書いた。その後、何度かふつうにやりとりがあったが、20 代半ば、遠方から突然の電話があり、何か特別なことがあったのだろうと車を走らせ、それからおつきあいするようになった。4 人の子どもをもうけ、孫も 2 人いる。あの日、妻は母親を探しに行ったのだと思う。母親に「助けることができず申し訳ない」と謝ったら、「結婚して幸せだったと思う」と言ってくれた。

一義さんに電話のことを尋ねると、アメリカ人のボランティアからこのベルガーディアにある森の図書館のことを聞き、去年の 11 月に初めて来た。電話のことは知らなかった。「電話して声が聴こえたわけではないが、そこにいることを感じ、想いを伝え、伝わったと思った」と涙ぐまれる。以来、何度か足を運んできた。娘や甥なども誘って連れてきたが、今回、一緒に来たおばさんは小さなマリア様の人形を作っているとのことで、ひとつ頂いた。作ってみたら、妻の母親がとても喜んでくれた。「それならできる」とたくさん作るようになり、「2000 人ものご縁を頂きました」とおっしゃった。

一義さんは、当時、ホテルに勤めていたが、消防団だったこともあるし、皆の顔を知っているので、最初の頃は、自衛隊が印をつけた遺体を見て、それが誰かを明らかにするボランティアをしていた。「どろぼうと間違えるからやめとけ」と言われ、それからは遺体運びを手伝うようになった。29 歳の娘さんも、当時は遺体探し

のボランティアをしたそうだ。「遠くから来た人たちが一生懸命やってくれているのに、自分たち町の者がやらないのはよくない」と考えていたので、それは良いことだと思った。おばさんも、「若い娘にとっては厳しい作業だったろうと思ったが、全国からたくさんの方が来て頂いて、本当に感謝している、そのエネルギーをもらって私たちも動けた」と何度も強調される。自分たちが復興して、それを見て頂くことが恩返しだと思っているそう。

一義さんは、復興のためにと立候補して、市議員になった。今も仮設住宅に暮らしている。仮設の集会所に鍵がかかって人が集まらないことを問題だと思い、名古屋の喫茶のような店を入れ、モーニングを 300 円くらいで提供してはどうかと考えている。神戸では、家賃が 6 千円から 6 万円になってから、外出もままならず孤独になったと聞いた。おばさんのアイディアは、高田にある、そして多くは捨ててしまうわかめのはしっこや大根の皮などあるものを薬味にして、おかゆを朝食にして安く提供してはどうかというものだ。震災前、冷凍で働いていた中国人たちは、高田の人が捨てていたキャベツの外の葉で餃子を作っていた。大阪の人でも大根の皮できんぴらを作る。見習うべきだと思う。お金が少なくても工夫すればできることはたくさんある。住めるところがあつてありがたい。「仮設におかゆバーできたらいいですね！」と夢が広がる。





## 風の電話

主宰者である佐々木格さんは、釜石市で生まれ育ち、地元で鉄鋼マンをやっていたが、1999年に54歳で会社を辞め、大槌町に移り住んだ。約6600平方メートルの敷地を整備し、草花を植え、庭園を造った。仙人のように山のなかで時折来る動物とだけ会う生活だった。見えないものを見る、聴こえないものを聞くという自分の基礎はその時できたと思う。妻の方は釜石の保育園園長で、そこから通勤したそう。ロックガーデン、イングリッシュガーデン、石造りの小屋と心赴くままに増やしていき、電話ボックスを置いたところで震災に見舞われた。

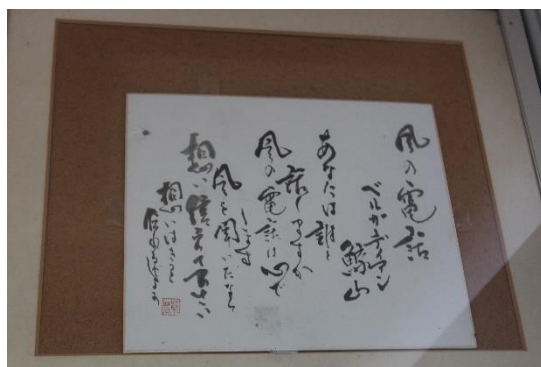
電話ボックスは、もともとオブジェとして設置しようと思って探していた。NTTは譲ってくれなかったが、思いが届いたのか、大船渡の喫茶店のなかにあったボックスをもらえることになった。屋根はなく、あとで作った。

ちょうどその頃、いとこが肺がんになり、書道家でもあったので、病床で「風の電話」の文字を毛筆で書いてもらった。元気になってくれなにかと思っただが、亡くなった。自分のために電話を置きたいと思っていたら、震災がおきて、押し寄せた津波がホテルや民家を次々とのみ込む姿を高台から目撃し、「被災者の癒しの場」として、2011年4月に電話を設置したのだという。あまりの惨事に、アイディアとしてあった「風の電話」を急ぎ完成させ、ガーデン・カフェを始め、森の図書館が完成したところだった。庭園内には、夫婦の自宅のほか、現在は、絵本や児童書を集めた「森の図書館」や来訪者の憩いの場として建てた「ツリーハウス」もある。精神科医や臨床心理士、子どものグリーフケアのNPOなどが応援してくれて、いろいろな催しが持ち込まれているとのことだった。

パーティーが終わった後、私も電話ボックスに入ってみた。遠くで青く輝く海を眼前に犠牲になった人々のことを思いながら受話器をとると、突然、カタカタとボックスが揺れ始めた。電話ボックスの外の草木もさわさわと揺れていた。2分ほどして収まったが、不思議な体験だった。後で聞いたところ地震だったらしいが、何か特別なエネルギーを感じた。「汽水域」という言葉が浮かんだ。汽水域とは、淡水と海水が混じ

り合う水域を指す。きっと、ここは、あの世とこの世が混じり合う汽水域になっていて、「風の電話」は、そのシンボルなのだ。東北には、あちこちに、あの世とこの世が混じり合う時空間がある。被災地では、新たに多くの怪談が生まれ、語られているとも聞いた。復興は、土地土地と深く結びつき育まれてきた文化の再発見とともにあって欲しい。

気仙沼の漁師・畠山重篤さんの「汽水」という概念に出会ったのは、その後のことだった。河川水が注ぐ海、汽水域は海藻や魚介類の宝庫であり、河口は、人間と生き物たちが交錯する十字路なのだという。畠山さんたちは、2009年に「NPO 法人森は海の恋人」を設立し、川がその養分を運びだす森の再生活動を行ってきた。東日本大震災以降、生き物は消え、海は死んだものと皆が思ったが、森づくりや環境教育を続けるなかで、実際、定期的な潜水調査で海の生き物の回復が確認されているそうだ。





## 吉里吉里国との出会い

国道 45 号線を走っている途中、大槌町で「吉里吉里」という案内板を見かけた。実は、遠野で「きりきり善兵衛」というレストランに入り、「きりきり」とは何だろうと気になっていた。どうやらこのあたりの地名らしい。そして、井上ひさしの『吉里吉里人』のことを知った。吉里吉里村が日本から独立するというこの小説は 30 年以上前に書かれ、話題を呼んで日本 SF 大賞を取ったらしい。ちなみに、「きりきり善兵衛」とは、江戸時代の海の豪商・前川善兵衛のことなのだそう。地元の人誰でも知っているのだろう。なんだか面白くなってきて、『吉里吉里人』を読んでみることにした。分厚い三巻本らしいが、キンドルで買ったため、厚さは感じられない。それでも、通勤時間に少しずつ読んで、ひと月近くかかった。

吉里吉里の駅は、震災の影響で運休している JR 山田線にあるが、小説に出てくる吉里吉里村は、宮城県と岩手県の県境、東北本線沿線にあることになっている。物語は、主人公古橋を含む乗客 808 名を乗せた夜行列車「十和田 3 号」が一関手前で急停車し、旅券がない者は出入国管理令違反であると、子どもたちからなる入国警備官が銃を構えて乗り込んでくるところから始まる。全体的にドタバタ劇の体裁を取っているが、その内容は、まったく時代を先取りしている。やれ増産しろ、減反しろ、合併しろと国益のことしか言わない日本政府に愛想を尽かした吉里吉里人たちが、この日の朝、日本国から独立をはかったというのだ。吉里吉里国の人口は 4200 人、公用語は吉里吉里語（ズーズー弁）、金本位制を取り、食

料自給率百パーセント、地熱発電まである。国民一人一人を大切にする農業・医療・平和立国として入念に独立の準備をしてきた。

読み進むにつれ吉里吉里人たちへの思い入れが強くなっていくので、最後の最後に独立が失敗に終わったことを知って残念でたまらず、がっかりしている。今の日本の状況を思えば、どうしても吉里吉里国独立を果たして欲しかった。そうして調べているうちに、実は、吉里吉里人たちの独立精神はいまだ健在であることを知った。

大槌は大震災で大きな犠牲を受けたところのひとつだが、吉里吉里の住民はどの地区よりも早く復興対策を行ったそうだ。

2011 年 4 月 14 日の毎日新聞によれば、住民たちは、「行政を待っていたら、いつまでたっても復旧しない」と、吉里吉里小学校の避難所に自分たちで災害対策本部を立ち上げ、食料班、医療班などを組織して活動を開始した。住民自ら行方不明者の捜索をしつつ、重機を使って国道や町道の瓦礫を撤去し、コンビニ在庫のパンや飲料水を救援物資として配った。防災用に準備した発電機を使い、医療用の電源を確保。重傷者や透析患者を運び出すため、吉里吉里中学校の校庭にヘリポートを示す“H”のマークを書き、自衛隊のヘリが患者を搬送した。震災 5 日後にこの地区に入った自衛隊員は、片づけられた瓦礫の様子をみて、「ここまで自力で復旧させるとは」と感嘆したという。

そして、NPO 法人「吉里吉里国」が誕生した(<http://kirikirikoku.main.jp/index.html>)。

「先人の知恵に学び復興計画策定には、スピードが必要で、仮にこのまま国や県の決定を一方的に押し付けるようなことがあっては、被災者のあきらめ感を助長しかねない。我々が忘れていた先人達のこの知恵を再び取り戻し、我々住民自らリスクを管理できるような街づくりを目指し、次世代に残す事業を行わなければならない」と思い、吉里吉里の住民有志自らが立ち上がって、その協力者達と NPO 法人化にいたった」という。「復活の森」プロジェクト、自伐林業の普及、薪文化の復活・継承、森林教室の開催を事業とすることで、津波災害復興に向けて新たな雇用の創出と、経済復興に関わる地域主体の取り組みを地元住民と一体となって地域再生に取り組んでいる。いつ



か訪ねることができたらいいなと思っている。

## 2014年11月1日(土)

### 宮古でのプロジェクト

今年は、社会福祉法人若竹会、宮古市社会福祉協議会の共催を得て、2014年10月27日(月)～31日(金)は「おでんせプラザ」にて、11月3日(月)～7日(金)は「りあす亭」にて家族漫画展、11月1日(土)には、宮古市総合福祉センターにて、「団士郎漫画トーク」「うたと遊びのワークショップ」「アートで遊ぼう」のプログラムを実施した。



このプロジェクトは、もともと現地の支援機関と十年間協働するというアイデアでスタートしたものの、岩手では共催してもらええる機関と出会えず、現地のご協力を頂きながら、1年目は遠野、2年目は遠野&大船渡、3年目は宮古で開催したのだが、今年は、古くからの友人である東京おもちゃ美術館館長多田千尋さんを介して、宮古の社会福祉法人若竹会との出会いがあり、今後、パートナーとして、このプロジェクトを一緒にやってもらえることになった。先月の多賀城でのプロジェクトの前、打合せを兼ねて、ご挨拶に伺ったが、この法人では、4人のスタッフが東京おもちゃ美術館のアクティビティ・ディレクターの資格を取っているという。「それならば」と、これまでやっていた「アートで遊ぼう」のプログラムをお任せし、私たちが方がお手伝いさせて頂くという形をとることにした。

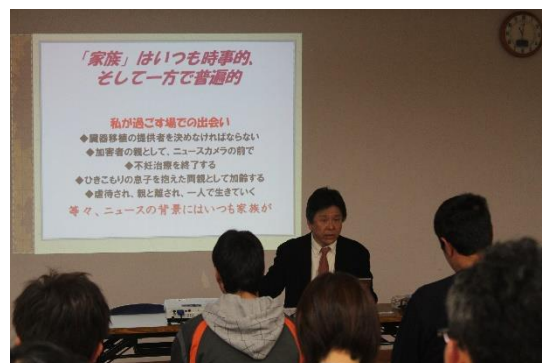
社会福祉法人若竹会は1975年に設立され、障がい福祉サービスと高齢者福祉サービスを幅広く展開してきた。今回、お世話になったのは、おもに就労移行支援・生活介護をされている「多機能事業所すきっぷ」のみなさんだったが、アイデアあふれる企画を準備してくださった。並行して、会場を飾るためのフラワーアレンジメント講座まであった。

「うたと遊びのワークショップ」では、鵜野先生のリードのもと、参加者、若竹会と立命館のスタッフが一緒になって、歌や手遊びを楽しんだ。「アートで遊ぼう」は若竹会の主導で、参加者みんなで白いシートにフィンガーペイントをしてひとつの大きな作品を作り上げた。誰がスタッフで誰が参加者かという枠を超え、それぞれ自由に交流



しながら、一体となってひとつのものを仕上げたことで、一同、大きな喜びと達成感を体験した。できた作品は秋の福祉祭りに展示して紹介してくれるという。また、大きな街の細かな塗り絵も準備されていたが、これは途中までしか仕上がらず、「続きは来年に」ということになった。皆で大笑いしながら、来年の再会への期待を膨ませた。

「おでんせ」の漫画展では、若竹会の利用者さんたちがお手伝いしてくれたということで、障がいのある利用者さんと漫画展に来てくださった地域の人たちとの交流も繰り広げられたと聞いた。私たちの想像を大きく超えて、このプロジェクトを地域の力を活性化するきっかけに活用してくれる若竹会スタッフの力には感嘆させられる。夜はスタッフの交流会、宮古の様子を聞かせてもらおうとともに、それぞれ親睦を深めた。驚いたことに、翌朝早くフィールドワークに出発する私たちを見送りに皆さんが宿まで来てくださった。







## 2014年11月2日(日)

### フィールドワーク

まず、宮古市田老地区を訪れた。「万里の長城」と呼ばれた高さ 10 メートルの防潮堤があったにも関わらず、津波で壊滅的な被害を受けたところだ。3 階まで浸水した「たろう観光ホテル」の 6 階から社長が防潮堤を越えて押し寄せる津波をビデオ撮影していた。今回、宮古観光文化交流協会「学ぶ防災」に申込み、ガイドとともに現地を歩き、メディアでは公開されていない部分を含むこのビデオ映像を観るというプログラムに参加した。



昭和 8 年の大津波の後、建造された巨大防潮堤の上に立ち、四方を見渡す。ガイドがパンフレットの写真と照らし合わせながら説明してくれる。防潮堤の内側に広がっていたはずの住宅地は巨大な空地となっていた。遠くに三陸鉄道が走っているのが見える。現在、14.7m の防潮堤建造の工事が始まったところだという。



防潮堤から下り、海辺の製氷工場を見に行く。壁面に津波到達点が記されていて、東日本大震災では 17.3 メートルの表示になっていた。2 番目は明治 29 年の 15 メートル、3 番目が昭和 8 年の 10 メートル、昭和 35 年にはチリ地震もあった。今回、田老では 181 名が犠牲になった。うち 41 名が行方不明。当時の人口は 4400 人、4%が犠牲になった。







それから「たろう観光ホテル」へ。階まで鉄骨が剥き出し、3階は窓のない建物を見上げ、一同、息を飲む。総合庁舎横の施設に移動し、社長がホテルの6階から撮っていたという映像をみせてもらった。ガイドがある種の実況中継をしてくれるのだが、映像が衝撃的すぎて、十分には理解できない。

最初の波は3メートルだったが、10メートルの第二波が入ってくると、岩場にぶつかって水柱が上がり、製氷機の建物の倍、35.6メートルのしぶきがあがる。避難場所になっていた田老の第一中学校には当時122名の生徒がいて、いったん校庭に集まったが、用務員が「これはもう学校が危ない」というので、左にある赤沼山に避難誘導した。住民や介護施設、グループホーム、保育園からも山に避難した。結局、学校は1階が浸水し、校庭には建物が4軒押し流されてきた。用務員は過去の被害を聞き知っていたから判断できたが、先生方は通勤族で昔の地元の話に詳しい人はいない。ざっと320人くらいが避難して助かった。生徒たちが高齢者の手を引き、園児をおぶって藪の中を駆け上がった。ただ、実際には181人が犠牲になった。意外と逃げない人が多く、極端な例だと防潮堤に上がって海を見ていた人もいた。ビデオにも、屋根にあがっている人、窓から出てきた人、それを助けにいく人も映っている。

たろう観光ホテルは、震災遺構として残すことが決まり、国から2億円の予算がついた。土地は市が買い上げて、ホテルは寄付、来年4月以降、改装して公開する。改装と言っても、外観はそのままだ、柱に錆び止めしたり、内部の安全対策をする。5階と6階を資料館にして、6階でビデオを見ても

らう。窓から実際の風景を見ながら映像と比べてもらえば、実感がわく。テレビ局やネットにも一部しか出していないのは、実際に田老に来て見てもらいたいという社長の思いがある。最近は学校から生徒たちが来るが増えた。修学旅行でも来るし、多い時は一日300人以上。とにかく避難すること、命を守ることを伝えたくてガイドをしている。



その後、山裾の小高い位置にある田老小学校の校庭横に立つ昭和8年大津波の翌9年3月に建立された記念碑へと案内された。高さ約2メートル、幅約1メートルの石で、海に向かう側には「大海嘯記念」の表題の下に5つの教訓が刻まれ、裏にはこの時の被害状況と記念碑建立の経緯が、当時の村長関口松太郎氏の名とともに刻まれていた。

- 一 大地震の後には津浪が来る
- 一 地震があったら此處へ来て一時間我慢せ
- 一 津浪に襲れたら何處でも此の位い高所へ逃げろ
- 一 遠くへ逃げては津浪に追付かる
- 一 常に近くの高い所を用意して置け



うか。今回、17.3メートルの津波が来たところに、新たに14.3メートルの防潮堤を作ることになったのだろうか。映像のなかでも強く印象に残ったのは、巨大な津波が押し寄せてくるのに、防潮堤があるために何も見えず、防潮堤を越えて津波が襲ってくるまで、その下を何事もないかのように普通に走っている車の様子だった。複雑な思いを抱えつつ、大槌、釜石の様子を見ながら空港へ向かった。

つづく



昭和8年の大津波の犠牲者は911名、生存者はわずか36名と石碑に刻まれていた。この惨状を受けて、高さ10メートルの防潮堤が建造された。同時に、高台にある小学校横に記念碑を建立し、「5つの教訓」を忘れないこと、そしてこれを次の世代に伝えていくことを誓い合った。しかし、今回の地震で、「地震があったら此處へ来て一時間我慢せ」は必ずしも守られなかった。「万里の長城」に守られている安心感があったのだら

